昭和十年に二代目、新井覚太郎社長のもとで事業を拡大、株式会社となり化学機械や水圧機を製造して発展ゆく。

昭和十二年には本所江東橋に鉄筋コンクリートの本社ビルを竣工（この建物は東京大空襲にも焼け残った）。

この新井覚太郎社長の個人的な相談役となったのが相磯凌霜だった。

相磯については、新井鉄工所の重役とか経営に関わったと書かれることがあるが、さつきさんによれば、そういうことはまったくなく、新井覚太郎の個人的な話相手で週に二、三度ほど出社するくらいで、会社の経営にはまったく関わっていなかったという。

以前、鉄を扱う商社にいたことがあり、同じ「鉄屋」として話が合ったので、新井覚太郎社長のいい話相手になったのではないか。

また、相磯凌霜の奥さんは元新橋の芸者。荷風の二番目の奥さんが新橋の芸者、八重次（のちの舞踊家、藤蔭静樹）だったこともあり、それが縁で荷風と親しくなったのではないかという。

相磯凌霜は明治二十六年東京、神田の一ツ橋の生まれ。明治天皇の従医だった相磯慥（まこと）は凌霜の伯父になる。良家の子であることがうかがえる。スポーツに長けているだけでなく大変な趣味人だった。

戦後、さつきさんは、相磯と共に会社によく立寄った荷風のことを覚えているという。

「荷風さんは市川に住んでいらしたでしょう。中央公論の嶋中（鵬二）社長に相磯さんと会われたあと、嶋中さんが車で荷風さんを市川まで送ってゆかれる。うちは途中の錦糸町でしたから、相磯さんをそこで降ろす。このとき、よく荷風さんもうちに立寄ったんです。礼儀正しい方でしたが、私なんかには、なんの関心も持ちませんでしたね」

新井太郎氏から、貴重な写真を見せてもらった。荷風が嶋中社長、新井覚太郎社長、そして相磯凌霜と共に新井鉄工所の前で写っている。

『断腸亭日乗』昭和二十九年五月十九日に「午後島中高梨両氏写真師を伴ひ来話。錦糸堀新井工場に相磯を訪ふ。今戸橋及び雷門を歩み永田町八百善に至り晩餐の馳走になる」とあるから、この日に撮られた写真だろう。「島中」は嶋中鵬二、「高梨」は中央公論社の荷風を担当した編集者、高梨茂。「写真師」とあるのは秋庭太郎『考証　永井荷風』（岩波書店、一九六六年）によれば木村伊兵衛のこと。この写真も木村伊兵衛が撮ったことになる。

これまでこの写真は見たことがない。貴重なもの。新井家で大事に保管されていたのだろう。

新井鉄工所は二〇一六年に鉄工所の事業を撤退。二〇二〇年に社名をアライプロバンスと改め、総合不動産事業を発足させた。

荷風と縁の深い会社がいまも健在とはうれしいことである。